存 在 と 過 去 時 制

堀 田 知 子

1．はじめに

時制の選択に際して、その文中で指示されている事物の存在の有無、つまり発話の時点においてそれが現存、あるいは生存しているかどうかが問題になることがある。例えばQuirk et al.(1972)は、次のような二つの文を比較している。

a. Albatrosses *are* large birds.

b. Albatrosses *were* large birds.

どちらもalbatrossという鳥についての記述であるが、現在時制が用いられているaは現在時・過去時・未来時に適用できるgeneric statementであるのに対し、過去時制が使われているbはより限定された陳述であり、albatrossという鳥が今はもう絶滅してしまっているということを示唆すると述べている。

また大江(1982)は、次の三つの文の比較を行っている。

a. My father spoke French well.

b. John wrote poems.

c. The tree bore fruit in fall.

まずaはmy fatherに内在する能力を伝える文であり、過去時制が用いられていることから、その父親はすでに亡くなっている可能性が高い。次にbではジョンは亡くなっている必要はなく、単に詩を書くことをやめていればよい。これにはwhen he was in collegeのような過去時を表す表現が続くのがふつうである。またcでは、the treeがもはや存在しないという可能性もあるが、話し手がそれから離れた所に住み、現状が知り得ない場合も考えられる。ここではaにおけるような、主語が死亡しているという解釈を「死亡読み」、bの、そういう習慣や継続的行為が現在ではもう行われていないというような解釈を「終了読み」、cの現状が分からないという解釈を「不明読み」と呼ぶことにする。

本稿では過去時制の用法の中でも、特にaに見られるようなものを中心に、認知的な観点から考察したい。

2．過去時制の意味

まず、過去時制のもつ一般的な意味特性について、Leech, Quirk, Comrieの説明を次に示しておこう。

Leech(1971)

There are two elements of meaning involved in the commonest use of Past Tense.

One basic element of meaning is: 'The happening takes place before the present moment.' This means that the present moment is excluded. . . . Another element of meaning is: 'The speaker has a definite time in mind.'

Quirk et al.(1985)

a.The event/state must have taken place in the past, with a gap between its completion and the present moment.

b.The speaker or the writer must have in mind a definite time at which the event/state took place.

Comrie(1985)

Past tense locates a situation to the left of the . . . present moment time point. The meaning of the past tense is location in time prior to the present moment.

現在時制が基本的に発話の時点とつながりをもつのに対し、過去時制は発話の時点より以前に起こった事柄について用いられ、しかも発話の時点とその時点との間には切れ目があるというのがこれらの定義から導き出される過去時制の意味特性である。しかし、実際にはもちろん例外もあり、よく言及されるのは、次に示すような間接話法の時制の一致・歴史的現在・仮定法などである。

(1) But I had no idea he *was* a friend of yours. (MS)

(2) Let us reconstruct. At 4 o'clock, Mrs. Inglethorp *quarrels* with her son, and *threatens* to denounce him to his wife. . . . (MS)

(3) If I had money, I *could* buy the book.

現在時制と過去時制の用法は明確に区別できるものではなく、この二つの時制の選択には、語用論的・認知的な要素も少なからず関与している。本稿ではこのような問題について、過去時制を中心にまとめてみたい。

3．過去時制と存在

冒頭で述べたように、永続的な性質や状態を表す述語動詞が過去時制で用いられると、その主語がその時点でもはや存在しないということを示唆する場合がある。

(4) a. Mary was hungry.
b. Tom was sad.
c. Nick lived in London.

(5) a. Mary had blue eyes.
b. Tom was both brilliant and good-natured.
c. Nick loved children and animals.

(4a,b,c)はいずれも、過去の限られた期間における一時的な状態を表しているので、主語の指す人物が死亡しているという含みはなく、終了読みになる。これに対し(5a,b,c)は主語が生まれつきもっている性質や永続的属性についての記述であるので、日常の言語使用においては、①主語の指す人物が死亡している（死亡読み）か、あるいは ②話し手とその人物とのつながりが発話の時点ではすでに切れていて、その人物の現在の状態について話者がよく知らないか(不明読み)、この二つのうちのどちらかであると考えられる。(5a,b,c)につ

いて「以前はそうだったが今は違う」という終了読みをするには、かなり特殊な文脈（例えばcの場合では、何らかの理由で Nick の人格がすっかり変わってしまったというような）が必要とされる。

Anderson(1973b)は、主語の指す事物が現存する場合は現在形・過去形のどちらを使っても叙実することができるのに対し、現存しない場合には現在形による叙述は不適切になるとして、次のような例を示している。

(6) a. The present president *visits* his mother frequently.
b. The present president *visited* his mother frequently.
(7) a.*The late president *visits* his mother frequently.
b. The late president *visits* his mother frequently.

また Anderson(1973a)は、次の(8b)は人間の下位集合についての叙述なので、現在・過去という時制の区別ができるが、(8a) は時制の区別ができない総称文であり、したがって時間を特定する now のような語は、(8b)には付加できても(8a)にはできないと述べている。

(8) a. The rhinoceros is an animal.
b. That man is a baker.
(9) a.*The rhinoceros is an animal now.
b. That man is a baker now.

そして、(8a)と同じことが次のような文についても言えるとしている。

(10) That man is her son.

これは(8a)のような総称文ではなく、主語は特定の人間を指示しているが、now を付加すると不適切になる。

(11)*That man is her son now.

「その男が彼女の息子であること」は(8a)と同じく時制の区別ができない事柄であり、主語の指す人物の存在の有無以外はこれを時間的に限定することができないからである。

さらに Anderson(1973b)は、次のような比較も行っている。

(12) a. Fred was a footballer but he isn't any more.
b.*The dodo was a bird but it isn't any more.

(12a)では、主語の指す人物の状態とか身分に関して過去・現在の区別ができるのに対し、(12b)では、そのような区別ができないために非文法的になる。言い換えれば、一時的状態を表す Fred was a footballer.は「終了読み」ができるので(12a)では矛盾を生じないが、The dodo was a bird.の場合はその読みができないので、(12b)では矛盾を起こすのである。この違いは次のような文の文法性の違いにも表れている。

(13) a. Fred used to be a footballer.
b.*The dodo used to be a bird.

used to は、状態動詞と共に用いられると過去の状態を指し、典型的には現在の状態との対立を示す。したがって(13a)のように一時的状態を表す場合には過去形と同じように使うことができるが、(13b)のような事物の存在そのものを叙述する文では非文法的になる。

以下ではこのような事物の存在と過去時制との関係について、考察の対象をさらに広げ、実際の例を示しながら見ていきたい。

3.1. 主語の現存性と過去時制

まず文中の主語の指す事物の現存性が問題になる場合について見てみよう。次の各例は、死亡した人物の性質についての叙述なので、過去時制が用いられている。(以下、死亡しているとされている人物を太字で表記することにする)

(14) **The late Shaitana** *was* bit of a Nosy Parker. (CT)

(15) **The late Mr Fortescue** *was* the kind of crook who is always careful to play safe. (CT)

(16) **He** *was* rude and overbearing in manner and was a definite bully. (PR)

(17) **The dead woman** *had* not the gift of commanding love. (MS)

次にこのような主語の生死と時制の表現との関係を直接問題にしている用例をいくつか示してみよう。

(18) a. 'Hattie was never like that, I won't allow you to say such things. She *was* a gentle warm-hearted girl, even if she was —a little simple mentally. Hattie *would never have killed* anyone. ' (DM)

b. '. . . when you talked of "Hattie", you were talking of two different people —one a woman you disliked who would be "better dead", and against whom you warned me "not to believe a word she said"—the other a girl of whom you spoke *in the past tense*, and whom you defended with a warm affection. I think Madame, that you *were* very fond of poor Hattie Stubbs. . . . ' (DM)

(18a)は、ある殺人事件の真相を知る人物が、Hattie という女性について述べた発言であるが、これを聞いて名探偵ポワロは本物の Hattie がすでに死亡していると推理する。そのヒントになったのは例文(18b)の中で述べているように、(18a)の話者がその話の中で無意識に使った過去時制である。そしてポワロは今いる Hattie が実は偽者であると看破するのである。

(19) 'Who *was* he?'

'What makes you think he's dead?'

'I didn't say he was dead.'

'You asked who he *was*.'

'Well, I don't know.'

'But why didn't you say, 'who is he?' (LL)

これは最初の発話者が「彼」について過去形を使って質問したために、その人物がすでに死亡しているという認識をもっていると相手に判断され、そう思う理由を詰問されている場面である。

(20) 'A sly, scheming, clever cat, that's what she *is*,' said Miss Brewis tearfully.

'You say *is*, not *was*, I observe,' said Poirot.

'Of course she isn't dead!' said Miss Brewiss, scornfully. (DM)

生死不明になっている女性の悪口を言った相手に対し、その発言の中で過去時制でなく現在時制が使われたことをポワロが見逃さず指摘すると、その相手は「彼女が死んではいない、生きている」ときっぱり断言している。

(21) 'The awful thing is,' said Mrs Oliver, 'that she wanted to be a sex maniac's victim, and now I suppose she *was*—is—which should I mean?' (DM)

ある変わり者の娘がゲームの中で変質者の犠牲になる役を演じることを希望していた。ところがそれがはからずも現実の中で起こり、その娘が殺されてしまった。これは気が動転した話者がそれについて述べている場面で行われた発話で、その娘はすでに死亡しているので過去形を使おうとしたが、それもどうも奇妙に思えて現在形で言い直してみたりと、どちらを使うかで混乱している場面である。

また次のように used to が使われている場合も同様で、「彼女」が死亡していることを表している。

(22) Oh, she *likes* showing off. I mean she *used to like* showing off. (HP)

以上、主語に関する永続的な性質や状態の記述が過去時制で行われると、その主語がもはや存在していない可能性が高くなること、言い換えれば故人についてのそういう叙述を行う場合には、ふつう過去時制が用いられるということを見てきた。そこでは、人間の存在自体が過去の出来事として処理されているのである。また次に見るように、これは人間に限ったものではなく、無生物についても同様のことが言える。

(23) 'Yes,' said the lawyer, 'it is quite possible that there may be a later will than the one in my possession.'
'There is a later will.' It was Poirot who spoke.
'What?' John and the lawyer looked at him startled.
'Or, rather,' pursued my friend imperturbably, 'there was one.'
'What do you mean—there *was* one? Where is it now?'
'Burnt!' (MS)

3.2. 人間関係と過去時制

次に２人（あるいはそれ以上）の人間同士の関係、たとえば友人・同僚・夫婦・親子・兄弟などの関係を表す文について見てみよう。仮に John と Harry とが過去において友人関係にあり、そのうちの片方、例えば Harry が死亡しているとする。その場合には、次の a,b,c のいずれの言い方をしても構わない。

(24) a. John was Harry's friend(a friend of Harry's).
b. Harry was John's friend.
c. John and Harry were friends.

そしてこれらはみな、used to を使ってそれぞれ次のように言い換えることができる。

(25) a. John used to be Harry's friend(a friend of Harry's).
b. Harry used to be Harry's friend.
c. John and Harry used to be friends.

次に実際の用例を示してみよう。

(26) Of course! I *was* a friend of your husband's. We were together in India. (TC)

(27) Carl von Deinim *was* my friend. I knew him in England some years ago. (NM)

(28) Mrs Fortescue's death must have been a great shock to you, Mr Dubois. You *were* great friends, were you not?' (MS)

(26)は上の(24a),(27)は(24b),(28)は(24c)とそれぞれ同じタイプである。他の用例を追加しておこう。

(29) You're not denying, are you, Mr Dubois, that you *were* a very close friend of Mrs Fortescue's? (MS)

(30) He's a stockbroker, he *was* my father's best friend—probably my father trusted him. (LP)

(31)'Lynk and I are partners in the Golden Horn.'

'You mean you *were*.' (SP)

友人関係と同様に夫婦関係の場合も、どちらが故人であっても、次のように言うことができる。

(32) a. Mary was(used to be) John's wife.

b. John was(used to be) Mary's husband.

c. John and Mary were(used to be) man and wife.

逆に言えば、(32a,b,c)はすべて①Mary and/or John が故人（死亡読み） ②John と Mary が離婚した(終了読み) ③現在の状況は分からない(不明読み)という三つの可能性をもっている。そして終了読みの場合はそれぞれ次のように言うことができる。

(33) a. Mary was(used to be) John's wife, but she isn't any more.

b. John was(used to be) Mary's husband, but he isn't any more.

c. John and Mary were(used to be) man and wife, but they aren't any more.

実際の用例をあげてみよう。

(34) Mrs Fortescue, Adele—*was* his second wife and about thirty years younger than he was. . . . She is very good looking—a real sexy piece, if you know what I mean. (PR)

このように A,B が友人、夫婦またはそれに類する関係にあり、そのどちらかが故人である場合、その二人の関係は過去形を使って表されるが、主語としては A,B,あるいは A and B のどれがきても論理的な意味は変わらない。言い換えると、友人関係や夫婦関係が過去時制を使って表されている時、①死亡読み、②終了読み、③不明読みのいずれの可能性もありうるということになる。

次に親子などの血縁関係場合について考えてみよう。例えば Mary と John が親子関係にあり、母親の Mary が生きていて、息子の John が死亡していると仮定した場合にはどうなるであろうか。

(35) a. John was Mary's son.

b.?Mary was John's mother.

故人を主語にとる(35a)は適切であるが、(35b)は不適切である。友人関係や夫婦関係と違い、親子関係を過去時制で叙述する場合、主語の指す人物の現存性についての制限があり、生存している人間を主語にとることはできない。逆に母親の Mary が死亡していて、息子の John が生きている場合は、(35b)はよいが(35a)は不適切になる。このことは、残された

人間にとって、「～の母親である」「～の息子である」という関係は、生きている限りずっと持続するということを表している。またこの関係は一時的属性ではないので、ふつうは次のようにused toを使って表すことができない。

(36) a.?John *used to* be Mary's son.

b.?Mary *used to* be John's mother.

また次のような文も当然のことながら不適切になる。

(37) a.?John was Mary's son but he isn't any more.

b.?Mary was John mother but she isn't any more.

これらは親子や兄弟など血縁関係全般にわたって言えることで、次の(38a,b)も血縁関係の叙述であることから「終了読み」はない。またふつうの状況では「不明読み」も考えにくいので(38a,b)は、どちらも少なくとも主語の指す人物は故人であると考えられる。

(38) a. John was Harry's brother.

b. Mary was Harry's grandmother.

次に実際の用例をあげておく。

(39) He *was* my brother. He died three days ago. (TB)

今度は主語の存在が前提される1人称主語について、夫婦・姻戚関係その他の社会的関係と血縁関係とを比較してみよう。

(40) a. I was John's wife(mother-in-law, friend, partner, colleague).

b.?I was John's mother(son, sister, brother, grandmother).

(40a)の場合はJohnが死亡しているか、あるいは離婚など、そういう関係が消滅していれば問題はない。一方(40b)のように親子などの血縁関係では、主語の指す人物は故人でなければならないので、メタファなど、特別な文脈なしには不自然になる。

このように、われわれの認識の中で、友人・夫婦・師弟・同僚など、いわば社会的に成立している一時的で解消可能な関係と、親子・兄弟などの生物学的な血縁関係とでは時制の用法に関して明確に区別されていることが分かる。

3.3. 主語・目的語関係と過去時制

今度は主語と目的語の指す事物の関係と過去時制について考察してみよう。

(41) a. Mary loves John.

b. Mary loved John.

c. Mary loved John, but she doesn't any more.

(41a)はMaryもJohnも生存していることを表す。これに対して(41b)は ①Mary and/or Johnが故人である（死亡読み） ②MaryもJohnも生きているが、Maryが心変わりした(終了読み) ③MaryとJohnはかつてはそういう間柄だったが、現在はどうか分からない(不明読み)、という三つの可能性をもっている。またcの場合は言うまでもなく②の終了読みだけになる。次にこれに類した実例を見てみよう。

(42) He *despised* poor Mrs Val and *snubbed* her. She dislikes—*disliked* him a good deal, I think. (PR)

これだけを読むと、二人のうちのどちらが故人であるのか明確ではないが、死亡している

のは実は「彼」の方である。それが主語・目的語のどちらにきても、過去時制が用いられる。第2の文で現在形を過去形に言い直しているのは、この文の話し手が死亡後まだ間がない彼に過去時制を使うことに慣れていないということを表している。このように、love, despise, dislike などの動詞は、主語・目的語のどちらかが故人であれば、過去時制が用いられる。これは know についても同様である。

(43) a. Mary *knows* John.

b. Mary *knew* John.

c.?Mary *knew* John, but she doesn't any more.

Mary, John の両方が生存している場合は現在形が用いられるのに対し、どちらかが死亡している場合は b のように過去時制が用いられる。(43)の解釈としては不明読みも可能であるが、know の語彙的意味を考えると終了読みはないと考えられ、したがって(43c)のような言い方は不自然になる。次に実際の用例を示してみよう。

(44) 'Yes,' she said slowly. 'I *knew* him.'

'*Knew* him? Why—is he— ' Victoria nodded.

'Yes,' she said. 'He's dead.' (MB)

第1の発話で know が過去形で使われたため、その目的語の指すが死亡していることが暗示され、それを知らなかった相手が驚いている。この knew の代わりに、例えば taught を入れた場合には、そういう暗示は生じないであろう。

しかし同じ know でも次の場合は違っている。

(45) "It says nothing of the kind in the letter," the Coroner pointed out.

"No, because Emily never could bear to put herself in the wrong. But I *know* her. She wanted me back. But she wasn't going to own that I'd been right. . . . "

(MS)

目的語の Emily が故人であるにも拘わらず、know が過去形ではなく現在形で使われている。これは、単に自分と Emily が知り合いであるという意味ではなく、その人物がどういう人間であるのか、その人間性について自分は知っているという意味で、I know what kind of person she was.の意味で用いられているのである。したがって、これは対象となる人物が死亡している現在にも妥当する事柄なのである。

know, love, like, dislike, hate, care などの動詞は、主語はもちろん、目的語に故人をとる場合には過去形が用いられるのがふつうである。しかし、次のように目的語に現存しない事物がきても過去形が使われない動詞もある。

(46) In all this, you see, I think of that poor Mrs. Inglethorp who is dead. She was not extravagantly loved—no. But she was very good to us Belgians—I *owe* her a debt. (MS)

この例では目的語は故人でも、owe が現在形で用いられている。他にも miss, remember などは、主語は生存している必要があるが、目的語が死亡していても現在形を使うことができる。このように、動詞の語彙的意味によって時制の選択が違ってくることもある。

4．話者の心理と過去時制

時制の用法は、どういう談話の流れの中で現れるのかによっても違ってくることがある。次の例において he や him の指す人物は故人ではないにも拘わらず、過去時制が用いられている。

(47) 'I have always known . . . Even as a child he frightened me . . . Ruthless . . . Without pity . . . And without conscience . . . But he *was* my son and I *loved* him. . . . I should have spoken out after Hattie's death. . . But he *was* my son. How could I be the one to give him up? ' (DM)

He was my son. I loved him.という部分だけを取り出せば「彼」が死亡しているという読みになるが、談話の流れの一部として見ると違ってくる。ここでは「彼」は生きており、しかも話し手は今でもその人物（息子）に対して愛情を抱いているのであるが、be 動詞や love が過去時制で用いられている。「彼」が話し手の息子であるということは、話し手はもちろん、聞き手にとっても周知のこと、すなわち旧情報である。話し手はそれが自分の息子であったが故に、殺人犯とわかっても見放すことができなかったと言っているのである。この He was my son.を現在形にして He is my son.とすると、旧情報を主張することになり、この談話の中では不自然になる。次の例も同様である。

(48) . . . The boy always had a way with him. Even got round me. . . Told a lie about the time he left me that day. I didn't contradict him, but I wondered. . . . I've wondered even since. But he was Elvira's boy—I couldn't bring myself to say anything. . . . (PR)

これも(47)と似たようなことを述べており、その人物のことを不審に思いながらも、友人の息子であったために、敢えて何も言わなかったのだと言っている。「彼は Elvira の息子」ということを叙実する時には、Elvira が故人であっても、既述のように主語が生存していれば現在形が用いられるのがふつうである。それが過去時制になっているのは、過去を振り返る一種の語り(narrative)のような流れの中で使われているからであると考えられる。

また、主語と話者との心理的関係、すなわち話者が主語に対してどういう感情や認識をもっているかということも、時制の選択に反映されることがある。

(49) It was a great relief to find out that she really didn't mean to take the Kingsport man. He was① rich, to be sure, and Gilbert is② poor—at least, to begin with; but then he's an Island boy. (AH)

ここでは二人の男性について、下線①では過去時制、②では現在時制が用いられている。しかしこの話の中で、the Kingsport man が故人であるわけではなく、この物語のヒロインであるアンが、そのキングスポートの男性と別れて、ギルバートと結婚することになったことを喜んでいる発言である。この発話者の認識の中では、キングスポートの男性は今となっては縁のなくなった人、つまり過去の人であるので過去時制を用いている。一方ギルバートは、アンの夫として未来にわたって深く係わっていく人物であり、そのため現在形を用いているのである。このように、時制の選択において、話し手と文主語との心理的な距離が大きく影響する場合がある。

5．終わりに

本稿では文の時制の選択が、主語、あるいは目的語として文中で指示されている事物の現存性によって違ってくるような現象について考察を行った。故人について述べる場合には、基本的には過去時制が用いられると言える。しかし、実際には人間関係の種類や性質、話し手と指示されている人物の間の関係、動詞の意味、談話の流れによっても異なる。また、ここではあまり論じる余裕がなかったが、その人物が死亡してどれくらいの時間が経過しているか、ビデオ・写真などを前にして話しているか、その人物についての情報をどれくらいもっているのかなど、文脈によって影響される場合も少なくない。このように文の主語や目的語などの現存性と時制との関係には、人間の認知システムが複雑に係わっているのである。

ついでながら、この問題は文化的な要素も含んでいると思われる。たとえば日本語では、故人について述べる場合、「彼は私の夫だった」とは言っても、「彼は私の父だった」という言い方はしないのがふつうである。つまり、英語の He was my father.をそのまま日本語に置き換えることはできないのである。これは、大きく言えば日本人と西洋人の生死観の違いをも表していると言えよう。

参考資料

MS	A. Christie,	*The Mystery at Styles*
CT	_____,	*Cards at the Table*
PR	_____,	*A Pocketful of Rye*
DM	_____,	*Dead Man's Folly*
HP	_____,	*Halloween Party*
LP	_____,	*Five Little Pigs*
TB	_____,	*They Came to Bagdad*
BS	_____,	*Man in the Brown Suite*
ER	_____,	*Elephants Can Remember*
NM	_____,	*N or M?*
LL	E. S. Gardener,	*Lazy Lover*
SP	_____,	*Silent Partner*
TC	S. Sheldon,	*If Tomorrow Comes*
AH	L. M. Montgomery,	*Anne's House of Dreams*

参考文献

Anderson, J. 1973a. "The Ghost of Times Past." *Foundations of Language* 10.

_____. 1973b. "On Existence and the Perfect." *Foundatins of Language* 11.

Comrie, B. 1985. Tense. Cambridge Univ. Press.

堀田知子. 1993. 「過去時制に関する一考察 —語用論的立場から」『ＴＡＭ試論集』第５号. ＴＡＭ研究会.

Leech, G. 1971. *Meaning and the English Verb.* Longman.

成田義光. 1989.「現在完了の時制と相」『ＴＡＭ試論集』第２号. ＴＡＭ研究会.

大江三郎. 1982. 『動詞Ｉ』講座・学校英文法の基礎 第４巻. 研究社.

Quirk,R., Greenbaum,S., Leech, G., Svartvik, J. 1972. *Grammar of Contemporary English.* Longman.

_____. 1985. *A comprehensive Grammar of the English Language.* Longman.